

長崎県における国際観光の動向と展望

International Tourism in Nagasaki Prefecture, Japan

北田 晃司¹
Koji KITADA¹

要旨

近年、わが国では国際観光が着実な成長を続けている地域と、停滞傾向にある地域の差が拡大している。本研究においては、特に2000年代以降停滞傾向が続いている長崎県を例に、その背景の分析および停滞状況からの脱却に向けての展望を行った。

長崎県は400年以上にわたり外国と交易を行ってきた伝統があり、海外との交流の中で形成された独自の文化を持っている。しかし日本を訪問する外国人観光客の多くは大都市でのショッピング、冬の雪景色、あるいは日本独自の文化的伝統などを高く評価する傾向があり、そのことがこれらの観光資源に恵まれない同県の国際観光の停滞に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。また長崎県の観光地は団体観光客への依存率がかなり高いこと、外国人観光客の間での知名度が日本人観光客に比べてはるかに低い観光地が多いことも、同県の国際観光の停滞の大きな要因であると考えられる。

このような状況にある長崎県の国際観光を立て直すためには、外国人観光客が観光地としての長崎県をより高く評価できる観光のあり方を提示することと、同県の観光地のもつ魅力を外国人観光客により積極的にアピールし、かつそれをより高く評価する可能性のある外国人観光客の属性を正確に評価することが重要と考えられる。前者については、2006年に長崎市が開始した、様々な観光ルートを徒歩でめぐる「さるく」ルートを県内の他に市町村にも広げた上でより多くの外国人観光客に体験してもらうこと、後者については、ちゃんぽんに象徴される中国文化の影響や、ローマ法王からも称賛を受けている隠れキリシタンの伝統、さらにはこれらの様々な文化的伝統が同じ場所に共存し、かつ新たな文化を生み出しているという事実を外国人観光客に積極的に伝えていくことが挙げられる。そして今後は、時間や空間の多様性の確認を自らのアイデンティティとする地理学が国際観光により積極的に参入していくことが望まれる。

キーワード：日本、国際観光、長崎県、外国人観光客

Key Words : Japan, international tourism, Nagasaki City, foreign tourists

I. はじめに

わが国の国際観光を長期的に見た場合、少なくとも外国人観光客の訪問数については着実に増加してきた¹⁾。このことを反映して、地理学においても近年、国際観光を扱った研究が増加している。これらは主に海外における国際観光を取り上げたもの²⁾と、わが国の観光地における外国人観光客の動向を扱ったもの³⁾に大別される。このうち後者の研究の多くは、わが国を訪問する外国人観光客の中で圧倒的割合を占める⁴⁾、東アジアの国または地域からの観光客の動向に注目したものが多数を占めている。

しかしこれらの研究において多く使用されている、外国人観光客に関する統計については、調査項目が国内観光客に比べて少ない、都道府県ごとの調査項目の差が大きい、あるいは調査が開始された年代が比較的新しいなどといった問題を抱えており、特に長期間に

わたる時系列的研究を行うことが極めて困難な状況にある。またこれらの研究の多くは、前述のように東アジアからの外国人観光客の動向に注目したものが多数を占めているが、それ以外の地域からの外国人観光客については、まだ十分に検討されているとは言えない。

しかし日本の国際観光に注目した場合、実際には地方によって外国人観光客の国籍構成に大きな相違が見られることは無視できない。例えば近年、わが国において外国人観光客の増加率が特に高い地域の1つである北陸および飛騨地方⁵⁾において最も増加が大きいのは台湾、さらにはヨーロッパからの観光客であり(北田, 2012)、逆に韓国や中国からの観光客はまだ少数に留まっている。

また、各都道府県における外国人観光客の訪問率についても、東京都や京都府のように、国際的に知名度の高い観光地を抱え、近年も外国人観光客が増加して

¹ 近畿大学・非常勤講師/Part-time lecturer, Kinki University, Japan

いる都道府県がある一方で、逆にわが国の国際観光における地位を低下させつつある県も存在し、両者の間には極めて対照的な状況が見られる。特に後者については、その大半が東京、大阪などの大都市から遠い地方、特に西日本に位置している⁶⁾。中でも九州地方では東アジアの国や地域から距離的に近く、また後述するように1990年代まではわが国の国際観光において重要な地位を占めていたにも関わらず、近年、外国人観光客の訪問率が低下する傾向が見られる⁷⁾。

これらの状況から考えると、今後、わが国の国際観光、特に外国人観光客の動向に注目して分析を進める上では、各都道府県または地方における国際観光が日本の国際観光においていかなる位置づけにあるのかより明確にすること、また東アジアのみならず、他の国や地域からの外国人観光客の嗜好や観光行動も検討対象とすること、さらに外国人観光客の嗜好や観光行動と各地方や都道府県の観光資源との関係についても綿密な分析を行うことなどが重要になると考えられる。

以上のことから本研究においては、かつてわが国の国際観光において重要な役割を果たしていたものの、現在、その地位を低下させつつある県の一例として長崎県に注目し、同県を訪問する外国人観光客の嗜好や観光行動の検討を通して、わが国の国際観光における同県の位置づけや国際観光の停滞要因、さらに今後なすべき対応について検討することにする。

Ⅱ. 長崎県における外国人宿泊客の時系列的分析

本章においては長崎県⁸⁾を訪問する外国人観光客のうち、特に同県への宿泊客数の多い国籍の観光客について、訪問数の増減やその背景について分析を行う。

表1は1990年代および2000年代における、わが国の国際観光における長崎県の位置づけの変化を示したものである⁹⁾。これによると、1990年代にはわが国を訪問する外国人観光客数はまだ2013年の半分にも及ばなかったものの¹⁰⁾、当時の長崎県は訪日外客訪問率については最高で全国第8位であり、特に1997年には全外国人の10%近くが同県を訪問したことがわかる¹¹⁾。

しかし2000年代に入ると、たしかに外国人の宿泊客実数（以下、宿泊客数と略記する）は1990年代よりも増加しているものの、訪日外客訪問率は5～6%程度に過ぎず、また全国順位でも15位前後と低迷している。このことからわが国の国際観光における長崎県の地位は、特に2000年代以降、低下する傾向にあると言える。

また表2は長崎県全体および、長崎市とその周辺、佐世保市とその周辺、島原半島、対馬といった県内の主要地区¹²⁾における外国人宿泊客数の推移を示したものである。これによると同県においては長崎市とその周辺、佐世保市とその周辺の2地区における外国人の宿泊客数が他の地区に比べてかなり多いことがわかる。しかし長崎市とその周辺における外国人宿泊客数は比較的順調に増加しているのに対し、ハウステンボ

スを抱える佐世保市とその周辺における外国人宿泊客数は増減の幅が大きく、特に同地区における宿泊客数が長崎県全体の外国人宿泊客数の増減を大きく左右していることがわかる。

続いて外国人観光客の国籍ごとの動向について検討する。表3は長崎県における韓国人宿泊客数、全国における韓国人観光客数および前者の后者に占める割合を示したものである。韓国人宿泊客は2002年以降、国籍別では最も多く、例えば2007年には236,670人と全外国人宿泊客数（表2）の6割近くを占めている。また長崎県における韓国人宿泊客も特に2000年代以降、全国における韓国人観光客の1割前後に達しており、表1に示した全訪日外客の長崎県訪問率に比べてその割合ははるかに高い。

次に地区別に見ると、近年、特に韓国から地理的に近く、1999年に同国の釜山との間に定期船が就航を開始した対馬における宿泊客数の増加が大きいことがわかる。

なお長崎県における韓国人宿泊客数が最も多かったのは2007年である。その最も大きな要因としては、2005年にわが国で愛知万博が開催されたことを契機に韓国からの短期観光客の訪日ビザが免除された¹³⁾こと、さらには当時の円安ウォン高状況などが挙げられる（読売新聞、2008年6月27日）。しかし同年の下半期以降、同国の通貨ウォンの価値が大きく低下するようになり¹⁴⁾、これ以降、宿泊客数が2007年を上回った年は存在しない。

また表4は韓国および台湾の団体ツアーによる九州北部の主要観光地の訪問率を示したものである。これによるとたしかに韓国人団体観光客は、長崎県における外国人宿泊客の過半数を占めているものの、九州において韓国人観光客に人気のある観光地の多くは長崎県以外の県に分布しており、韓国における、長崎県の観光目的地としての評価は必ずしも高いとは言えない。

表5は長崎県における台湾人宿泊客数、全国における台湾人観光客数および前者の后者に対する割合を示したものである。2013年現在、長崎県における台湾人の宿泊客数は韓国に次いで2番目に多く、特にハウステンボスのある佐世保市とその周辺における台湾人宿泊客数は例年、県内における同宿泊客数の7割以上を占めている。また前述のように長崎県の観光地に対する評価も韓国人観光客より高い。

しかし2000年代に入ると宿泊客数は大幅に減少している。これは主に2000年代以降、台湾人観光客の間で、北海道の人气が急上昇した影響が大きいと考えられ、しかもその影響は長崎県のみならず他の九州諸県にも及んでいる¹⁵⁾。また台湾人の長崎県宿泊客数が日本を訪問した全台湾人に占める割合も近年は5%前後に留まっている。このことは各国を訪問する外国人観光客の増減に、経済的要因や政治的要因と同様に、あるいはそれ以上に外国人観光客の嗜好の変化が大きな影響を与えることもあることを示していると言える。

表1 わが国の国際観光における長崎県の位置づけの変化

	1994年	1997年	2002年	2007年	2010年	2013年
①長崎県における外国人宿泊客数(万人)	6.5	21.5	19.7	39.8	31.9	38.1
②全国における外国人観光客数(万人)	191.5	239.1	309.5	595.4	636.2	796.3
③ ①÷②(%)	3.4	9.0	6.4	6.7	5	4.8
④長崎県の訪日外客訪問率(%)および全国順位	5.4 (8位)	6.0 (8位)	2.7 (15位)	4.3 (14位)	3.4 (16位)	2.8 (17位)

出典：①は長崎県観光統計，②はJNTO日本の国際観光統計2010年(平成22年)，④はJNTO訪日外客訪問地調査2010による。
②は商用客，その他客，一時上陸客を含まない。なお，2013年の②は日本政府観光局ホームページ，④は観光庁「訪日外国人の消費動向 訪日外国人消費動向調査結果及び分析 平成25年 年次報告書」(ホームページ版)による。(いずれも2014年6月2日にアクセス)

表2 長崎県および主要地区における外国人宿泊客数

	1994年	1997年	2002年	2007年	2010年	2013年
長崎県における外国人宿泊客数(単位:人。以下同様)	64,966	215,159	197,161	397,553	319,445	380,854
うち長崎市とその周辺	19,990	58,292	48,706	63,197	110,150	134,522
佐世保市とその周辺	35,618	139,768	121,154	246,924	141,862	127,611
島原半島	6,386	11,533	15,705	26,698	17,290	16,903
対馬	959	1,226	8,402	45,479	40,154	89,981
その他	2,013	4,340	3,194	15,255	9,989	11,837

出典：長崎県統計による。なお，「長崎市とその周辺」は「長崎・西彼」，「佐世保市とその周辺」は「佐世保・再開・東彼・北松」という原表記を改めたものである。

表3 長崎県における韓国人宿泊客数および全国における韓国人観光客数の推移

	1994年	1997年	2002年	2007年	2010年	2013年
①長崎県における韓国人宿泊客数(人)	8,369	22,975	77,105	236,670	176,380	174,469
うち長崎市とその周辺	4,015	10,327	19,986	31,946	47,278	45,601
佐世保市とその周辺	1,035	3,275	36,397	131,942	72,622	22,770
対馬	866	1,171	8,370	45,433	40,106	89,912
②全国における韓国人観光客数(人)	511,753	587,299	756,991	2,084,195	1,963,002	1,974,117
③ ①÷②(%)	1.52	3.91	10.19	11.36	8.99	8.84

出典：①は長崎県観光統計，②はJNTO日本の国際観光統計2010年(平成22年)による。なお，2013年の②については，日本政府観光局ホームページによる(2014年6月2日アクセス)。以下表5，表6，表7についても同様である。

表4 韓国および台湾の団体ツアーによる九州北部の主要観光地の訪問率

訪問率	韓国の団体ツアー			台湾の団体ツアー		
70%以上	福岡市	太宰府天満宮	別府 湯布院 阿蘇山	福岡市	太宰府天満宮	ハウステンボス
50%以上70%未満	熊本市			湯布院	柳川	
30%以上50%未満				長崎市	阿蘇山	別府 天山スキー場

出典：韓国および台湾の大手旅行社4社のホームページに掲載された，2010年1月中旬から2月末の間に出発する団体ツアーを考察の対象とした。

表5 長崎県における台湾人宿泊客数および全国における台湾人観光客数の推移

	1994年	1997年	2002年	2007年	2010年	2013年
①長崎県における台湾人宿泊客数(人)	34,949	135,683	55,317	95,401	64,309	100,889
うち長崎市とその周辺	4,121	25,202	4,721	9,317	12,552	21,222
佐世保市とその周辺	26,807	105,188	49,053	79,711	47,301	74,102
②全国における台湾人観光客(人)	562,053	725,785	769,074	1,255,642	1,139,339	2,067,269
③ ①÷②(%)	6.22	18.69	7.19	7.60	5.64	4.88

表6は長崎県における中国人宿泊客数、全国における中国人観光客数および前者の后者に対する割合を示したものである。たしかに中国人の宿泊客数自体は近年増加傾向にある。しかし長崎県における中国人の宿泊客数の、わが国を訪問する全中国人観光客に占める割合は逆に大きく低下している。これはわが国を訪問する中国人観光客が特に2000年代以降急増したものの、その多くが、東京、大阪、京都、山梨などの都道府県を含めたいわゆるゴールデンルートに集中しているためと考えられる（JNTO, 2011b）。一方、長崎県については、中国人観光客が日本観光において最も重要な項目の1つと考えているショッピングの目的地としての大都市がなく、観光地としての魅力が東京都や大阪府などに比べてはるかに小さいと考えられる。さらに中国と日本の間では2012年以降、尖閣列島をめぐる領土問題が深刻化していることも、国際観光に大きな影響を与えていると考えられる¹⁶⁾。

表7は長崎県におけるヨーロッパ人宿泊客数、全国におけるヨーロッパ人観光客数および前者の后者に対する割合を示したものである。なおここではヨーロッパのうち、イギリスからの宿泊客を除いた数値を示した¹⁷⁾。県内における分布では長崎市とその周辺への集中率が圧倒的に多い。これは特にハウステンボスの人気台湾などのアジアからの宿泊客に比べてかなり低いと考えられる。次に宿泊客数については比較的順調に増加しているが、長崎県におけるヨーロッパ人宿泊客数の全国におけるヨーロッパ人観光客数に占める割合は伸び悩んだままであり、特に2007年には減少幅が大きい。この理由としては2007年に世界的に最も高い評価を受けているガイドブックの1つであるフランスのミシュランの日本版が発行され、ヨーロッパにおける日本への注目度は高まったものの、長崎県の観光地の評価はあまり高くないためと考えられる。同ガイドは日本の主な観光地を一つ星、二つ星、

三ツ星の3段階に区分して評価を行っているが、特に三ツ星評価を受けた観光地についてはその大半が関東地方や関西地方、中部地方などに集中しており¹⁸⁾、長崎県を含めた九州地方の観光地の評価はあまり高いとは言えない¹⁹⁾。

たしかに同ガイドでは長崎市が二つ星観光地に指定され、九州の主要都市の中では最も評価が高い。また同市には東山手地区や南山手地区のような伝統的建造物保存地区に指定された地区が存在する²⁰⁾。にもかかわらず、同ガイドにおける長崎市の評価は、同じ伝統的建造物保存地区が存在する高山や金沢などに比べて低い。その背景としては長崎市における伝統的建造物の多くが大浦天主堂やグラバー邸に象徴される洋風建築であり、京都や奈良、さらには高山や金沢のように日本情緒の象徴的存在ともいえる和風建築の比率が高い都市の建造物に比べて評価が低いことが考えられる。

以上に述べたように、長崎県はわが国を訪問する外国人観光客が本格的に増加する前の1990年代までは外国人観光客の訪問率でかなり上位を占めていた。特に2001年まで長崎県における宿泊客数が最も多かった台湾からの観光客については、表5にあるように最盛期にはわが国を訪問する台湾人観光客の5分の1近くが長崎県、特にハウステンボスのある佐世保市とその周辺に宿泊していた。

しかし2000年代に入ると、確かに長崎県における外国人の宿泊客数それ自体は増加し、特に2007年には236,670人と過去最高を記録したものの、長崎県への訪日外客訪問率、あるいは同県における外国人宿泊客数のわが国を訪問した観光客総数に占める割合などから見た場合、国際観光における長崎県の地位は相対的に低下していると言える。

このような状況に至ったのは、これまで見てきたように、特に2000年代以降、長崎県において安定して増加を続けている国籍の外国人観光客が存在しない

表6 長崎県における中国人宿泊客数および全国における中国人観光客数の推移

	1994年	1997年	2002年	2007年	2010年	2013年
①長崎県における中国人宿泊客数（人）	1,348	3,471	6,121	12,224	15,384	16,608
うち長崎市とその周辺	688	2,968	2,298	3,045	6,924	12,419
佐世保市とその周辺	376	237	2,392	6,418	6,320	1,975
②全国における中国人観光客（人）	24,550	33,431	101,299	407,288	831,652	704,737
③ ①÷②（%）	5.49	10.38	6.04	3.00	1.85	2.28

表7 長崎県におけるヨーロッパ人宿泊客数および全国におけるヨーロッパ人観光客数の推移（いずれもイギリスを除く）

	1997年	2002年	2007年	2010年	2013年
①長崎県におけるヨーロッパ人（イギリスを除く） 宿泊客数（人）	2,722	5,638	5,772	9,136	16,016
うち長崎市とその周辺	データなし	5,010	4,701	8,424	14,993
佐世保市とその周辺	データなし	347	528	269	524
②全国におけるヨーロッパ人（イギリスを除く） 観光客数（人）	148,650	197,052	356,575	418,922	446,653
③ ①÷②（%）	1.83	2.86	1.62	2.18	3.59

ことが挙げられる。そしてその背景としては、特に2000年代以降の台湾人観光客の減少、あるいは2007年のミシュランガイドの日本版の発行を契機とする、ヨーロッパからの観光客の金沢、高山などの中部地方への訪問数の急増に象徴されるような、長崎県の観光地に対する外国人観光客の評価の低迷が挙げられる。たしかに長崎県にはヨーロッパ諸国や中国などのアジア諸国との交流の中で培われた異国情緒が存在し、そのことは少なくとも日本人観光客からは一定の評価を受けている。また比較的温暖な気候条件も見逃せない。

しかしこれらの観光資源は、外国人観光客の側からは必ずしも魅力のあるものとしては捉えられていない。長崎県では台湾人観光客の好むような雪景色はほとんど見ることができず、ヨーロッパ人観光客の好むような日本情緒を満喫できるような場所でもなく、また中国人観光客が好むようなショッピングを楽しめる大都市も存在しない。そして、日本人観光客を引き付けている異国情緒や温暖な気候は、外国人観光客にはむしろマイナスの影響を与えているとさえ言うことができる。

ただしこのことは、見方を変えれば、日本が国際観光の目的地として、外国人観光客の間では地方ごとの特徴に至るまでかなり広く知られるようになっていることを示しているとも考えられる。

Ⅲ. 長崎県の国際観光再興に向けた展望

本章では前章に示した状況を踏まえた上で、長崎県が今後、国際観光の活力を取り戻すためにはいかなる対策が必要なのか、特に政治的要因や経済的要因に比べてより長期的な視点に基づいた対策を必要とする、外国人観光客の嗜好、特に彼らの観光地としての長崎県に対する評価の向上に重点を置いて検討する。ここではまず、このような状況を打開するためには、団体旅行者と個人旅行者のどちらにより重点を置くべきか、また、実際に長崎県を訪問した外国人観光客が観光地としての長崎県をいかに評価しているのかアン

ケートの結果をもとに確認することにする。

表8は、日本の主要観光地における団体旅行者の比率を示したものである。これによると、長崎県の観光地は東京や大阪などから遠いこともあり、長崎市を除いて団体旅行者の比率がかなり高い。しかし前章で述べたように、長崎県の観光地は、表に示した札幌市のある北海道の観光地に比べて人気が低く、団体観光客だけでは集客力の大きな増加は期待できない。ゆえにこのように団体旅行者への依存率が高い状態から脱却することが、国際観光の停滞から脱却するための1つの重要な手段であると考えられる。

また表9は、長崎市を訪問した外国人観光客の訪問理由を示したものである。これによると、確かに長崎市は表8で示したように、県内の観光地の中では例外的に個人旅行者の比率が高いものの、訪問理由の中では特に「行きたい観光地があるから」や「長崎」というイメージに魅かれたという回答の比率が低く、長崎市は外国人観光客にとっては必ずしも積極的に訪れたい都市ではないと考えられる。

表10は、長崎市における主要観光地の入場者数または訪問率を示したものである。ここでは外国人観光客の訪問先が平和公園や原爆資料館に集中する傾向が強く、逆に長崎市の中心に位置し、原爆とは直接関係のないグラバー園などの観光地の訪問率が日本人観光客に比べて極めて低いことがわかる。さらに表11は外国人観光客が長崎市の観光地としての課題として挙げた項目を示したものであるが、ここでは特に市内宿泊の外国人観光客が、観光地の整備や観光情報の提供が不十分であると考えている比率が高いことが注目される。

以上のことから、今後、長崎県の国際観光地としての評価をより高めていくためには、外国人観光客、特に個人観光客の満足度をより高めていくことが何よりも重要であると考えられる。

次にその具体的な方法としては、大きく2つの点が挙げられる。1つは、外国人観光客が長崎県の観光地

表8 日本の主要観光地における団体旅行者の比率

観光地	比率 (%)
全観光地の平均	38.2
日本の主要都市	
東京 23 区	20.5
京都市	35.7
大阪市	38.4
長崎県の観光地	
長崎市	38.9
雲仙温泉	69.2
ハウステンボス	59.8
佐世保市	52.9
その他の地方都市	
札幌市	55.6
福岡市	35.4
別府市	67.6
広島市	12.8

単位：％。

出典：JNTO 訪日外客訪問地調査 2010 による。

表9 外国人観光客が長崎市を訪問した理由

順位	理由	割合 (%)
1 位	ツアーの訪問地に入っていたから	38.0
2 位	長崎の歴史や文化に興味があるから	17.8
3 位	被爆地だから	13.9
4 位	行きたい観光地があるから	12.5
5 位	「長崎」というイメージに魅かれて	5.3

単位：％。

出典：財団法人ながさき地域政策研究所（シンクながさき）の内部資料による。アンケートは2007年および2008年に行われた。なお、回答した外国人観光客は229人であり（複数回答）、国籍は中国（81名）、台湾（62名）、韓国（48名）で全体の8割以上を占めている。

表 10 長崎市における主要観光地の入場者数または訪問率

調査内容	①主要観光地の 入場者数(人)	②国内観光船利用客の 観光地訪問率(%)	③国際観光船利用客の 観光地訪問率(%)	④市内宿泊の 外国人観光客の 観光地訪問率(%)
入場者数または 訪問率1位の観光地	グラバー園 882,820	グラバー園 63.6	平和公園・原爆資料館 75.8	平和公園・原爆資料館 42.9
入場者数または 訪問率2位の観光地	長崎原爆資料館 663,277	出島 46.5	グラバー園 41.8	稲佐山 20.8
入場者数または 訪問率3位の観光地	長崎歴史文化博物館 519,407	中華街 39.5	出島 26.2	長崎歴史文化博物館 18.7
入場者数または 訪問率4位の観光地	長崎県美術館 392,544	平和公園・原爆資料館 25.6	中華街 23.7	出島 7.0
入場者数または 訪問率5位の観光地	出島 375,586	浜町アーケード 17.1	浜町アーケード 11.1	グラバー園 3.6

出典：①は長崎県観光統計(2009年), ②~④は財団法人ながさき地域政策研究所(シンクながさき)の内部資料(②は2007年, ③は2006年, ④は2007年および2008年にアンケートを実施)による。また②の回答者数は129人, ③の回答者数は413人(うち中国114人, イギリス84人, アメリカ68人, カナダ58人の合計で8割弱を占める), ④の回答者数は229人(表9と同じ)である。

表 11 外国人観光客からみた長崎市の観光地としての課題

外国人観光客が改善が 必要だと考えた項目	①国際観光船利用客	②市内宿泊の外国人観光客
1位	お土産になるものが少ない 14.8	まつりやイベントの充実 15.3
2位	観光施設が少ない 14.3	史跡・名所などをもっと整備する 12.1
3位	標識・案内板がわかりにくい 7.3	情報提供サービスの充実 11.4
4位	日本らしさが感じられない 5.3	クレジットカードが利用できる施設の充実 10.1

単位：%。

出典：財団法人ながさき地域政策研究所(シンクながさき)の内部資料(①は2007年, ②は2008年にアンケートを実施)による。なお①は表10の③, ②は同じく表10の④と同じ母集団である。

としての魅力をより高く評価できるような観光のあり方とはいかなるものか検討し, それを外国人観光客に積極的に提示することである。もう1つは長崎県の観光地としての魅力はいかなるものなのか客観的に評価し, その上でそれをより高く評価している外国人観光客の属性はいかなるものか正確に把握することである。

このうち前者の例としては, 現在は主に日本人観光客を対象としているものの, 2006年以降現在まで続いている「さるく」を参考にすることができる。「さるく」とは、「まちをぶらぶら歩くという意味の長崎弁」である(長崎さるくの公式ホームページによる。2014年2月17日アクセス。)長崎市はわが国がバブル経済の絶頂期にあった1990年に, 多くの企業をスポンサーとする「旅博覧会」を開催し, 同年に長崎市とその周辺では国内観光客を中心に1,710,413人が宿泊した。しかしその後はバブル経済の崩壊もあって, 同市への宿泊客数は減少し, 1998年以降は100万人を割り込み, 2000年代前半には60万人台にまで落ち込んだ(各年度の長崎県観光統計のホームページによる。2013年12月7日アクセス)。

このような状況を打開するために考案されたものが「さるく」博覧会である。これは2006年に長崎市役所

が中心となって設定したもので, 様々なテーマに沿った観光地を散策するコースを設定し(図1), 参加者に自らの好むコースを選んで参加してもらうという画期的な試みであった。これらのコースはその多くが所要時間2時間前後, 歩行距離2km前後の短いものであり, いずれも特定の項目に絞った明確なテーマが設けられている。またコースを自由に散策することも可能であるが, 事前予約によるガイド付きのコースも設けられている。なおガイド付きの場合, 参加人数は1コース当たり15人前後に制限されている²¹⁾。

このようなコース設定からも明らかなように, 「さるく」は団体観光客よりも個人観光客を重視し, また観光バスなどを利用して有名な観光地のみを訪問するのではなく, 特定のテーマに関する限られた数の観光地を観光客が自由に, あるいはガイドとともに小さな路地に至るまで時間をかけて歩くことに重点を置いたものである。その背景にはバブル崩壊以降, 日本の観光が団体客中心から個人客中心に変化したことを考慮し, また長崎市のもつ様々な歴史的観光資源を観光客により時間をかけて味わってもらうことを重視しようとする姿勢があった。この「さるく」博覧会は長崎市の魅力をより深く味わえるという点が評価され, 予想



図1 長崎市中心部における「さるく」ルートの分布(2006年)

長崎市役所の内部資料による。なお、一部のルートまたはルートの名称について、現在(2014年)と異なるものが存在する。

以上の人気を博したことから、翌2007年以降も名称を「さるく」と変更した上で継続することが決定され、現在に至っている。

表12は各年におけるさるくの参加人数を示したものである。ここにあるように翌年の2007年には参加人数は前年の半分以上に減少したものの2009年からは回復し、NHK大河ドラマ「龍馬伝」が開催された2010年には、長崎市と縁の深い坂本龍馬の足跡を求めて多くの観光客が訪問したこともあって、参加人数は2006年とほぼ同一の水準に達した。翌2011年には再び減少したものの、その後は参加人数がほぼ3万5千人から4万人程度で定着している²²⁾。

なお、2011年からは中国、2012年からは韓国が

らの観光客を対象とした「さるく」も開始されている²³⁾。たしかに今後の動向については未知数の部分が多いものの、前述のように「さるく」が主に団体観光客よりも個人観光客を対象として創設されたものであること、同じく前述のように今後、長崎県の国際観光の復活のためには外国人の個人観光客が重要なキーワードとなることを考慮すると、その動向には、長崎県の今後の国際観光について考える上で参考になる部分が多いと考えられる。またこの「さるく」は長崎市のみならず、特に中心市街地に歴史的な史跡が集中している島原、平戸などの県内の他の観光都市にも応用することが可能であると考えられる。

次に後者については長崎県、特に長崎市がこれまで

表12 長崎さるくの参加者数の推移(2006年から2013年まで)

	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
さるくの参加人数	52,398	22,937	22,620	39,536	51,209	26,847	36,897	40,000
うち通さるく参加人数	48,973	20,322	18,615	33,262	38,173	18,253	21,407	22,400
学さるくおよび食さるく参加人数	3,425	2,615	4,005	6,274	13,086	8,594	15,490	17,600

出典：長崎国際観光コンベンション協会の内部資料による。

ポルトガル、オランダ、中国、イギリス、フランス、ポーランドなどの数多くの国々と交流を行い、狭い範囲に様々な文化が共存し、また新たな文化を育んできたことを外国人観光客により積極的に伝えていくことが重要であると考えられる。たしかに長崎県は被爆地として、外国人観光客に平和や戦争放棄などの大切さを伝える重要な場所としては少なからず認識されているものの、様々な文化の共存やそれらが新たな文化を生み出してきたこと、あるいは交流を通じての国際交流精神をも学ぶことのできる場所としての価値は、前述のように原爆関係以外の観光地の知名度が非常に低いため、まだ十分に知られているとは言えない。

次にこのために長崎県を訪問する外国人観光客に特にアピールする価値がある観光要素としてはまず、中国との文化交流の伝統が挙げられる。長崎には中華街、孔子廟、崇福寺などの中国との文化的交流を示す史跡が多く、また「おくんち」や長崎ランタンフェスティバルのような祭礼やちゃんぽんなどの食品にも中国の影響が見られるものが多い。たしかにⅡ章で指摘したように、長崎県を訪問する外国人観光客の中で、台湾や中国などからの宿泊客数は近年伸び悩みが大きい。また彼らの多くはショッピングへの関心が高く、歴史や文化への関心の高い観光客の割合は必ずしも多いとは言えない。しかしこれらの中国系の観光客は、台湾からの観光客だけでも長崎県を訪問する外国人観光客の中では韓国人観光客に次いで多いこと、また彼らの言語や文化は韓国からの観光客と同様に日本の言語や文化との類似性が高く、ゆえに他国籍の外国人観光客に比べて長崎の文化や歴史をより深く理解することが容易であることを考えるとその存在意義は決して無視できないと考えられる。

もう一つの重要な要素としては、隠れキリシタンの伝統が挙げられる。長崎県には江戸時代に禁教令などによる厳しい弾圧を受けたにも関わらず、明治時代に信教の自由が許されるまで250年以上もキリスト教の信仰を守り通した隠れキリシタンによって建てられ、現在も礼拝が行われているや教会が県内のあちこちに分布しており、これは世界でも稀有な存在と言える²⁴⁾。

これらの長崎県内一円に分布するカトリック教会(図2)は2007年にわが国において、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として、世界文化遺産登録のための暫定リストに登録されている(毎日新聞、2007年1月24日)。これらの教会群が将来、世界遺産として国際的に広く認知されるようになった場合、例えばフランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ポーランドといった、カトリック教徒が国民の大多数を占め、かつ長崎との関係も深いヨーロッパの国々、あるいは前述のように長崎県における宿泊客数が最も多く、またキリスト教徒が国民のほぼ半数を占める韓国からの観光客にも訴える所が多いと考えられる²⁵⁾。さらに2014年にローマ法王庁が「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産への登録を支援する意向を表明した(朝日新聞、2014年3月5日)ことは、外国



図2 黒崎天主堂

長崎市外縁部の外海地区にあり、2007年に大浦天主堂や浦上天主堂などととも「長崎の教会群」としてわが国の世界遺産候補に指定された。

人観光客に観光地としての長崎県の価値や知名度を高める上で大きな影響を与えたことは否定できず、今後の動向が注目される。

IV. おわりに

本研究においては近年、国際観光が停滞傾向にある県の1つである長崎県を取り上げ、その停滞の要因について様々な国籍の外国人宿泊客の増減およびその背景について長期的に検討し、また国際観光の今後の復活に向けて留意すべき点についても考察を加えた。

その結果、長崎県の国際観光の停滞については、冬の雪景色、ショッピングを行うための大都市、日本独自の文化的伝統を象徴するような寺社や集落といった、外国人観光客に人気のある要素に乏しいこと、また、その割には団体ツアーへの依存度が高く、かつ原爆関係を除くと外国人観光客における観光地の知名度がかなり低いことが特に大きな理由であることが明らかになった。

このような状況を打開するためにはまず、外国人観光客の間で観光地としての長崎県の魅力を高める上で最も望ましい観光スタイルを提示することが重要であると言える。その中でも特に、2006年に長崎市において開始された「さるく」は、現在は主に日本人観光客を対象としているものの、観光バスなどで有名な観光地のみを選んで見るのではなく、特定のテーマに沿った限られた数の観光地を個人で、あるいはガイドとともに十分に時間をかけて歩くコースを多数設定しており、観光の重点をそれまでの団体観光客から個人観光客に移したことで、今後、長崎県の観光地をより高く評価する外国人観光客、特に個人観光客を新たに呼び込む契機となる可能性を有していると言える。

次に重要なことは、長崎県の観光地あるいは観光要素の文化的価値、特に様々な外国文化が共存し、またそれらの融合により新たな文化が生み出されてきたという事実を多くの外国人により積極的に紹介し、かつそれを高く評価する可能性の高い外国人観光客の属性

をより正確に把握するための努力を続けることである。特に中国との文化交流を示す観光地や食品、あるいは隠れキリシタンの伝統を持つ教会群は外国人観光客の間でもすでにある一定の評価を受けるようになっており、このことが新たな外国人観光客、特に個人観光客の流れを産み、長崎県が国際観光の主要目的地として再びその地位を高めるようになる可能性は十分にあると言える。特に長崎県と同様にカトリックの伝導が行われ、地元のインディオと新たな来訪者である白人や黒人の文化との融合により新たな文化が形成されてきたことを示すラテンアメリカの史跡の中で、すでに世界遺産に登録されたものが存在する²⁶⁾ことは、長崎県の国際観光地としての新たな飛躍の可能性を示唆するものと言える。

最後に、本研究で扱ったような国際観光への地理学からのアピールのあり方についても言及したい。これまでわが国において、国際観光については経済学、経営学をはじめ、様々な学問分野からのアピールが行われてきたが、その多くが主に地元の経済的利益に重点を置いてきたものであることは否定できない。しかし今後、国際観光研究における地理学のオリジナリティをより確固たるものにするためには、ただ地元の経済的利益や、国際観光に関わる様々な主体の関係の分析のみに終始するのではなく、伝統的に空間と時間の多様性に基礎を置いてきた学問として、地方ごとの観光資源の多様性、同じ観光地に対する外国人観光客の評価の多様性、さらに海外旅行のあり方の変化などの指標を通して、観光地および外国人観光客双方の多様性を何よりも尊重し、それに基づいてより望ましい形の観光のあり方を積極的に提示していくことがより重要になるのではないかと考えられる。

さらに今後の研究課題としては、日本各地の観光地に対する海外からの評価およびその経年的変化についてよりフィールドを広げて研究を進めること、また海外における日本人観光客の観光行動の経年的変化やその背景について検討を進めることなどが挙げられる。

謝辞

本稿の執筆にあたり貴重なご意見をいただいた、中部大学名誉教授の中藤康俊先生、立教大学の杜 国慶先生、近畿大学の辰己勝先生、お忙しい中、貴重な内部資料を快く公開して下さった財団法人ながさき地域政策研究所（シンクながさき）の原田幸二様、長崎国際観光コンベンション協会の本庄寛伸様、長崎市役所の久保俊哉様、さらに本稿の作成にあたり討論の機会を与えて下さった、わが国および海外各国の地理学関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。なお本研究の内容については、2012年10月に神戸大学で開催された日本地理学会秋季学術大会において発表しました。

注

- 1) わが国を訪問する外国人観光客数（商用客などは含まない）は東日本大震災発生前の2010年には過去最高の6,361,974人に達していた（JNTO, 2011a）。なお2013年には円安や東南アジアからの観光客の増加などにより、この数値をさらに上回る7,962,517人を記録している。JNTOのホームページによる（2014年6月24日検索）。
- 2) 例として池永（1999）、加賀美（2002）、横山（2007）、森本（2009）などがあり、研究者が自らの研究対象とする国または地域における国際観光の動向について注目したものが多し。
- 3) 主なものとして北田（2011）、小松原（2004）、清水・祖田（2005）、清水（2007）、金（2009）、呉羽・金（2009）、松村（2009）が挙げられる。なお本研究で扱った長崎県における国際観光を取り上げた研究については8）を参照。
- 4) 2013年現在、わが国を訪問する外国人観光客数を国籍別にみると上から台湾、韓国、香港、中国の順になり（JNTOのホームページによる。2014年6月24日検索）、東アジアの国または地域が上位を独占している。
- 5) 北田（2012）は主に富山、石川、福井の3県と岐阜県の高山を中心とする飛騨地方の国際観光を取り上げており、両者を合わせて「北陸および飛騨地方」という呼称を用いている。
- 6) 都道府県レベルで1997年から2010年の間に訪日外客（商用客なども含む）の訪問率の減少が大きい県としては、本研究で扱う長崎県の他に沖縄県（4.7%→2.7%）。都道府県別順位では11位→21位）、宮崎県（2.9%→0.3%）。都道府県順位では17位→26位）などがある。数値はいずれもJNTO（2011b）による。
- 7) 九州地方における訪日外客の訪問率は1997年の19.0%から2010年の10.9%へと大きく減少しており、同じ時期に2.9%から8.8%へと大幅に増加している北海道とは極めて対照的である。数値はJNTO（2011b）による。
- 8) 長崎県における国際観光を取り上げた既存研究としては、同県の隠れキリシタンに象徴される伝統的なキリスト教文化が観光資源化される過程やその課題に注目した木村（2007）、松井（2009, 2012）、ハウステンボスに対する韓国人大学生のイメージについて調査を行った李（2002）、さらに雲仙温泉を訪問する外国人観光客の客層の変化に注目した佐藤（2009）などがある。
- 9) 表1で数値を示した年はいずれも、世界レベルでの経済不況やインフルエンザの流行などの国際観光に否定的な影響を与える要因が少ない年を選んだ。
- 10) 1990年代にわが国を訪問した外国人観光客は最多の1999年でも2,560,343人に過ぎず、2013年の7,962,517人の半分にも及ばなかった。数値はJNTO（2011a）による。
- 11) 表1の訪日外客には商用や家族訪問などでわが国を訪問した外国人も含まれているが、長崎県についてはその大半が観光客であると考えられる。たしかに米軍基地が存在する佐世保市とその周辺では親族訪問で宿泊するアメリカ人宿泊客の存在を無視できないが、2002年の19,262人をピークに減少傾向にあり、また、2004年以降はほぼ毎年、長崎市とその周辺での宿泊者数が佐世保市とその周辺での宿

泊者数を上回っていることから（長崎県観光統計のホームページによる）、その重要性はそれほど大きくないと考えられる。

- 12) 原表においては、長崎市および近辺の市町村を含んだ地区は「長崎・西彼」、佐世保市および近辺の市町村を含んだ地区は「佐世保・西海・東彼・北松」と表記されているが、ここでは便宜上、前者を「長崎市とその周辺」、後者を「佐世保市とその周辺」と表記することにする。また原表にはこの2地区の他に、表2に示した島原半島、対馬、さらに平戸・松浦、諫早・大村、五島、壱岐の4地区の数値が挙げられている。
- 13) ビザの免除は台湾からの短期観光客に対しても実施された。
- 14) この結果、2009年には韓国人観光客が前年の2008年と比べてほぼ半減するに至った（読売新聞、2010年7月8日）。
- 15) 台湾から日本への訪日外客については、2002年に北海道の訪問率が急上昇し、それ以降は毎年10%以上、全国の都道府県順位でも8位を上回っている。これに対して福岡県や長崎県などの九州諸県の訪問率は徐々に低下し、全国順位でも10位を下回るようになってきている。数値は各年のJNTO訪日外客訪問地調査（2004年以前のタイトルは訪日外国人旅行者調査）による。
- 16) 例えば長崎県では2011年11月に、戦前以来の歴史をもつ上海航路が14年ぶりに再開され、長崎県の観光の活性化に大きな役割を果たすことが期待されたが、翌2012年10月には尖閣諸島の領有をめぐる日中関係が悪化した影響を受けて運行が休止された（読売新聞、2012年9月27日）。2013年には運営会社により同航路の免許の更新も取り下げられ（読売新聞、2013年2月20日）、再開の目途は立っていない。
- 17) 長崎県に宿泊したヨーロッパからの宿泊客においてイギリス人の占める割合は例年3割強であるが、近年、通貨ポンドの切り下げや経済情勢の悪化の影響を受けて日本を訪問するイギリス人観光客数がフランスなどの他のヨーロッパ諸国と異なり停滞傾向にあることから（JNTO, 2011a）同列に扱うことが困難であると判断した。
- 18) 特に中部地方には高山や金沢、白川郷などのように、伝統的な家屋や庭園、工芸品などに恵まれた、いわゆる日本の古きよき伝統をアピールできる中小都市や集落が多く、これらは2007年以降、ヨーロッパからの観光客の間で爆発的な人気を得て訪問客数が急増している（北田、2012）。
- 19) 九州地方については沖縄県・石垣島の川平湾、鹿児島県の屋久島、福岡県の九州国立博物館の3か所が三ツ星観光地に指定されているものの、ヨーロッパ人観光客の評価の高い、古い歴史のある都市の旧市街地に立地する観光地の中で三ツ星評価を受けたものは皆無である（Michelin Cartes et Guides, 2009）。
- 20) 特に南山手地区には大浦天主堂やグラバー園などがあり、長崎県のみならず、九州を代表する観光地である。
- 21) 以上の経緯については、長崎国際観光コンベンション協会のホームページ（<http://www.at-nagasaki.jp/nitca/>）に詳しい（2013年10月2日アクセス）。また同じさるくでも各自が自由に散策するものを「遊さるく」、ガイド付きのコースを「通さるく」と呼んで区別しており、2014年現在、「遊

さるく」は45コース、「通さるく」は29コースある（さるくのホームページ <http://www.saruku.info/> による。2014年2月17日検索）。所要時間については「遊さるく」は「通さるく」よりも30分ほど短く想定されている。なおこの他に、期間限定で特定のテーマをより掘り下げた「学さるく」や長崎の名物料理を楽しむ「食さるく」もある。

- 22) 表12にあるように、近年は「通さるく」よりも「学さるく」および「食さるく」の方が参加人数の増加率が大きいことが注目される。これは「学さるく」や「食さるく」が「通さるく」よりもさらに専門性が高いこと、また「通さるく」のかわりに個人単位で「遊さるく」を行う参加者やコースのリピーターが少なくないためと考えられる。
- 23) 中国人観光客向けのさるくには中国文化コース、異国エリアコース、繁華街コース、平和のコース、孫文ゆかりの地コースの5コースが、韓国人観光客向けのさるくには旧外国人居留地コース、日本二十六聖人殉教と長崎の歴史コース、平和を学ぶコース、夕陽が美しいキリシタンの里コース～遠藤周作が魅せられた町、散策と温泉が楽しめるリゾートアイランドの同じく5コースがある（さるくのホームページによる。2013年9月5日検索）。なおこの他に不定期ではあるが、案内者が英語で案内を行うコースもある。
- 24) 長崎県あるいは長崎県における隠れキリシタンの歴史について概観するには、原田（1964）、長崎県高等学校教育研究会社会科部会（1974）、邦光（1977）などが好適である。なお邦光を除いて近年、再版または改訂版が市販されている。
- 25) 実際、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は韓国のカトリック関係者からも高く評価されている（毎日新聞、2013年4月6日）。なお韓国には長崎県の隠れキリシタン史跡と同様に、キリスト教徒の殉教に関連した史跡が各地に存在する。
- 26) 例として、「パラナ川北岸のイエズス会伝道所」（パラグアイ。1993年登録）や「グアラニー族のイエズス会伝道所」が挙げられる。後者はアルゼンチンとブラジルの国境地帯に分布し、アルゼンチン領は1983年、ブラジル領は1984年に世界遺産に指定された。

文献

- 朝日新聞（2014）：『世界遺産登録、パチカンが支援 長崎の教会群とキリスト教関連遺産／長崎県』長崎・1地方朝刊2014年3月5日、<http://database.asahi.com/library2/main/start.php>（2014年7月19日アクセス）。
- 池永正人（1999）：オーストリアアルプスにおける山岳観光の発展と山地農民の対応。人文地理, 51（6）, 62-79。
- 加賀美雅弘（2002）：魅惑のアルプス—スキーとハイキングでにぎわう国際観光地。広瀬佳一編著『ウイーン・オーストリアを知るための50章』明石書店, 134-138。
- 北田晃司（2011）：沖縄県における観光の国際化。地理学論集, 86, 24-40。
- 北田晃司（2012）：日本の国際観光における北陸および飛騨地方の台頭。歴史と地理, 658, 40-49。
- 木村勝彦（2007）：長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム。長崎国際大学論叢, 7, 123-133。
- 金 玉実（2009）：日本における中国人旅行者行動の空間的特徴。

- 地理学評論, 82, 332-345.
- 邦光史郎 (1977): 『キリシタンの里』 保育社.
- 呉羽正昭・金 玉実 (2009): 観光行動の空間特性. 神田孝治編著『観光の空間－視点とアプローチ』 ナカニシヤ出版, 102-111.
- 小松原尚 (2004): 観光・リゾート開発. 中藤康俊編著『国際化と地域』 原書房, 19-36.
- 佐藤大祐 (2009): 観光地の集客圏. 神田孝治編著『観光の空間－視点とアプローチ』 ナカニシヤ出版, 112-122.
- 清水伊織 (2007): 中国人の訪日旅行の形態とその変化－観光からツーリズムへ－. 地理学論集, 82, 37-52.
- 清水伊織・祖田亮次 (2005): 北海道におけるアジアからのインバンド・ツーリズム. 北海道地理, 80, 25-39.
- JNTO (日本政府観光局) (2011a): 『JNTO 日本の国際観光統計 2010年 (平成 22年)』 国際観光サービスセンター.
- JNTO (2011b): 『JNTO 訪日外客訪問地調査 2010』 国際観光サービスセンター.
- 長崎県高等学校教育研究会社会科部会 (1974): 『長崎県の歴史散歩』 山川出版社.
- 原田伴彦 (1964): 『長崎』 中公新書.
- 毎日新聞 (2007): 『世界遺産: 暫定リストに「長崎の教会群」など追加－文化庁』 西部朝刊 2007年1月24日. <https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMSK/main.jsp?ssid=20130830164542264gsh-ap01> (2013年8月30日アクセス)
- 毎日新聞 (2013): 『ソウル大司教区聖地巡礼団: 長崎の教会群, 世界遺産登録へエール/長崎』 地方版/長崎 2013年4月6日. <http://dbs.g-search.or.jp/aps/WMSK/main.jsp?ssid=20130830164542264gsh-ap01> (2013年8月30日アクセス)
- 松井圭介 (2009): 聖地創造と消費される文化. 神田孝治編著『観光の空間－視点とアプローチ』 ナカニシヤ出版, 45-55.
- 松井圭介 (2012): 『観光戦略としての宗教 長崎の教会群と場所の商品化』 筑波大学出版会.
- 松村嘉久 (2009): 大阪国際ゲストハウス地域を創造する試み. 神田孝治編著『観光の空間－視点とアプローチ』 ナカニシヤ出版, 264-274.
- 森本 泉 (2009): ネパールにおけるツーリズムの展開とツーリズム空間の形成. 神田孝治編著『観光の空間－視点とアプローチ』 ナカニシヤ出版, 89-99.
- 横山 智 (2007): 途上国農村におけるバックパッカー・エンクレープの形成－ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例として－. 地理学評論, 80, 591-613.
- 李 昌訓 (2002): ハウステンボスの観光イメージ調査分析－韓国の新世代大学生を中心に－. 長崎国際大学論叢, 2, 19-25.
- 読売新聞 (2008): 『観光客, 3年連続増 外国人伸び率は過去最高 県の2007年統計＝長崎』 西部朝刊 2008年6月27日. <http://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/> (2012年2月1日アクセス).
- 読売新聞 (2010, 西部朝刊): 『観光客 25万人増の 2813万人 県 09年速報 高速割引など要因』 2010年7月8日. <http://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/> (2012年2月9日アクセス).
- 読売新聞 (2012): 『上海航路運休 早期再開願う声 日中交流の関係者ショック』 西部朝刊 2012年9月27日. <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/yomiuriNewsArticle.action?yomiuriNewsAr...> (2013年4月27日アクセス)
- 読売新聞 (2013): 『上海便の免許 更新取り下げ HTBクルーズ』 西部朝刊 2013年2月20日. <http://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/yomiuriNewsArticle.action?yomiuriNewsAr...> (2013年4月27日アクセス)
- Michelin Cartes y Guides (2009): Le guide vert Japon. Michelin Cartes et Guides, Paris, France. (2014年11月10日受理)